

第三章 比企の里一 三善康信

郷子は、その夜ほとんどまんじりともせず夜を明かした。

明け方、まだ暗いうちから、桜色の桂に緋の切袴で厩から三日月を連れ出すと、昨夜重方に聞いた百穴の方角に向かって馬を駆った。

木曾義高に教えた秩父の山並みが遠く左手に見える。

義高と同じように自分もこのまま逃げ出したかった。

丘を降りて村の田んぼや畑を抜けると、もう一面低い緑草に覆われた起伏の少ない平原だった。遠くに高い山の目印はないが北へ向かう平原の一本道を進んでゆくので、迷子になることはない。その道がすこしなだらかな山道にかかった。林の中を抜けて行く道は深閑として家も無くひと一人会わない。重方に聞いたところでは、多分この辺りだろうと思われる所に着くと、前方に奇妙な小山が見えた。それは、灰色の岩山でその上から下まで方形の穴が数え切れないほど暗い口をあけている。岩山の上には木々が鬱蒼と茂っているが、穴が開いている山の上辺から下辺までは全く木が生えていない。

郷子は、三日月を降りると、無数の複眼をもつおどろおどろした妖怪に立ち向かうかのように正面から岩山を見上げた。

誰かの忘れ物か足元に錫杖が落ちていたので、それを拾って、太刀のように上から下に向けてびゅうと振った。するとすこし勇気がわいてきたので近くの洞穴を覗いた。朝の光の中でも薄暗い内部は狭く一人がやっと横たわれる程の奥行きしかない。光の当たらない奥には、緑黄色に発光するコケが自生しているようだ。郷子が、錫杖をつきながら滑りやすい岩山を登って、すこし大き目の洞穴を覗くと、蓬髪に顔中髭だらけの色もわからないほど朽ち果てた襦袢を纏った男が寝ていた。郷子は、ぎょっとして素早く身を引いたが、男と目が合ってしまった。

男は、郷子を目にしたとたん、がばっと半身を起こした。郷子は、身の危険を感じて、素早く岩山を滑るようにして降りたが、相手の男は、慣れているのだろう、岩山の上から飛び降りると両手を広げて、郷子の逃げ道を塞いだ。

「そこを退きなさい」

郷子は、そう言うと、持っていた錫杖を下段に構えた。男は、薄汚い乞食のような姿をしているが、着ている身なりからして、ここに隠遁している侍のように見えた。男は、郷子が一人であることを見て取ると、にんまりと笑った。

「このような美形の女子が、我らが巢窟に一人で来るとは、まさに飛んで火にいる夏の虫とはよく言ったものだな」

男は、若い女子と見て甘く見たのだろう、両手を広げたまま、郷子のほうに突進してきた。郷子は、下段に構えた杖をすばやく上げると隙だらけの面を思い切り打った。男は、ぐわあと唸ったがさすがは侍、その程度の面打ちではへこたれもしなかった。今度は、用心して、両手を前に突き出すと、次の打ち込みに供えた。

男は、久しぶりに興奮したのか、目をギラギラさせ顔には油じみた喜悦の表情をむき出しにしている。

郷子は、次に面を打ちにいったら、男の両手で錫杖が箠り取られるだろうと思った。そこで、上段から面を打つ素振りをして、男が両手を上げて構えた隙を捉えて、男の胸に思い切り突きを入れると錫がしゃりと鋭く鳴った。さすがの侍も出鼻を突かれた為はどうと後に倒れこんだ。その時、「お見事！」という感嘆の声を聞いたので、岩山を見ると男と同じような風体をした四～五人の乞食侍が、洞窟からこちらを見下ろしているのが見えた。そのうちの何人かは、手を叩いて喜んでいる。

郷子は、錫杖をその場に投げ捨てると、すばやく三日月に駆け寄って飛び乗り、比企の里に向けて疾駆させた。

郷子が、比企館に戻った頃には、日がかなり昇っていた。入り口で重方が待っていた。

「どこに行かれたのですか」

「いつもの通り、三日月を運動させていたのですよ」

「それにしても、すこし長かったようだけど」

「桜があまり綺麗なものだから、山のほうまで」

郷子は、百穴に行ったことは、話さないことにした。

「ところで、お祖母さまには、もう会いましたか」

「お祖母さまは、用事があるとかで今朝ほど、鎌倉に帰られました」

「ええ！もう帰ったのですか」

「姉上にお言付を残されました」

「なんと」

「夫を助け、良き妻になれと」

郷子は、絶句した。

(なぜ、馬の朝駆けの前に比企尼に会って、自分の気持ちを話さなかったのだろうか)

「結婚の相手は誰なのですか」

「まだ決まっているわけではないのよ」

郷子は、この弟に話せなかった。

比企尼は、今日、三善康信殿とよく話し合えと言った。

彼にいまの自分の気持ちをはっきり伝え、この話を断ってもらおう。

遅い朝餉を終えると、郷子は昨日比企尼と話したのと同じ部屋で三善康信と向き合った。

三善は、武士の直垂を着用しているが生真面目な学者のような印象を与える。

「昨日は良く眠れましたか」

「いいえ、ほとんど寝ていません」

三善は、郷子の素直な反応によく判るという感じで頷いた。

「朝早やく馬で出かけたとか」

「馬の運動は、毎朝の日課にしております」

「義経殿との話はさぞ驚かれたと思いますが」

「本当のことのようには、とても思えませんでした。それで、一晩考えた末に、お祖母さまにお話し申し上げようと思ったのですが、もうお立ちになったとか」

「鎌倉に至急帰らなければならない用事があるとの事でした」

「義経さまと静御前との話が耳に入ったものですから」

三善は、驚いた顔をした。

「そんなに早く・・・まあ、遅かれ早かれいずれ耳に入ることは予想していましたが、こんなに早くとは・・・」

「それで、この話は」

三善は、右手を郷子の口の前に広げると、それ以上話すのを押しとどめた。

「待ってください。それについては、私の話をまず聞いて下さい。そのために、私が来たのですから」

郷子が、黙って相手を見つめると、三善はほっと息を吐きそれから話し始めた。

「昨日始めてお会いしましたが、私の母は、比企尼の妹の子ですから、あなたの母とは従姉妹同士になります。私と貴女は、従姉妹同士の子ですから、又従兄妹という関係になります」

三善は、親族であることを強調して、郷子を安心させようとした。

「私は、嘗て都の官吏で、当初は太政官少納言の下で、詔勅・上奏文の起草や朝議の記録などをつかさどる少外記でした。その後、平清盛の娘徳子さまが、高倉天皇の中宮建礼門院になられるとその属（四等官）になりました。それで、後白河法皇と平清盛に関する情報は、ほとんど知ることが出来ました。比企尼の娘・すなわち私の母の従姉妹の婿たちが、蛭が小島に流された頼朝さまを、食料などの物質面で支えていたのは、知っていると思いますが、私は、私が知りえた情報を月に二回逐一頼朝さまに流していたのです。もちろん、これが平家に知れてしまうと大変な咎を受けることになったでしょうが、幸い、外には漏れませんでした」

三善は、その頃の緊張感を思い出したのか、一息ついた。

「私は、外記局にいた親友に、このことを告白しました。なぜ危険な思いをして告白したかというと、彼も平家一門のあまりにも専横な振る舞いを嫌っていることが判っていたからです。清盛が太政大臣になり。その他の要職のほとんどを平家一門で占めているために、いかに学問が優秀で行政能力があっても、平家の一門でない限り、重要な職務に就けないのです。ついに全国の知行国や荘園のほぼ半数は平家の所有になりました。また、日宋貿易の利権を独占し巨万の富を得ています。その上、十一歳の高倉天皇に自分の娘である十五歳の徳子を入内させ、二人の間に嫡男が生まれると、高倉天皇に譲位を迫り、孫である二歳の子を安徳天皇として即位させました。これで、清盛は、天皇の祖父となりさらに政治の実権を握ることになりました。

清盛の妻時子の弟である平時忠が『平氏にあらざば人にあらざ』と嘯いた話はあまりにも有名です。

われわれは、この状況を打破するためには、平家に対抗できる源氏の嫡流である頼朝さまに期待するほかないと意見の一致をみたのです。この親友は、大江広元といいますが、大變頭の切れる男で、行政官としては、まずは、他に比べるものがないほどの当代随一の俊英です。それで、私は、彼に頼んで、頼朝さまが、将来武家の棟梁になったら必要になるだろうと思われる全ての学問の講義書と兵学書などの参考資料を私の情報と一緒に送ってもらうことにしたのです」

「流人の頼朝さまに、二十年もの間送り続けたのですか」

「その通りです」

（なんと根気の良いことだろう。比企尼は乳母というある種肉親の情のようなもので食料などを送って助けたことは理解できなくもない。しかし、都の貴族であり官吏でもあった二人を、死罪になるかもしれない危険をも顧みずに二十年という気が遠くなるような期間突き動かしてきたものは、なんだったのだろうか）

「しかし、その事と私が義経さまの正室になることとどう関係するのですか」

郷子は、強い疑念にかられた。

「それをこれからお話するのですが、まず、後白河法皇の話から始めねばなりません」

「ええ、法皇さまですか！」

郷子は、その遠大な話に呆然とした。

「後白河法皇は、鳥羽天皇の第四皇子（雅仁親王）としてお生まれになりました。十歳の頃から、今様(民謡・流行歌)に熱中し、昼も夜も一日中歌い明かし、それが五十日も続いて、とうとう声が出なくなって、水も喉を通らなくなったということです。それで、鳥羽天皇は、皇位を継承する器ではないと、はなから見放していたそうです。そして、当の本人も、天皇になれるとは思っていなかったことはその後も今様狂いと遊蕩を改めなかったことから明らかです。

その後、鳥羽天皇は、祖父の白河院の強引な命令で、天皇を退位させられ、その第一皇子（崇徳天皇）が天皇に、自分は上皇になります。ところが、その後、白河院が死ぬと、鳥羽上皇は、自ら法皇となって、崇徳天皇を退位させて上皇にすると、後白河の弟の第九皇子をわずか三歳で天皇に即位させます。これが、近衛天皇です。

鳥羽上皇がなぜ崇徳天皇を退位させたかということ、崇徳天皇が祖父の白河院と自分の妻との間に出来た不倫の子ではないかと疑っていたからです。また、なぜ、後白河ではなくその弟を天皇にしたかということ、後白河が今様狂いであることと、近衛天皇がその時鳥羽上皇が寵愛していた後妻の美福門院の子供だったからです。

自分の弟が天皇になったために後白河が天皇になる可能性はほとんどなくなりました。しかし、後白河は、運の強いお人なのでしょう、弟の近衛天皇が十七歳の若さで死んでしまうのです。

そこで、後白河は、急遽次の天皇（二条天皇）が即位されるまでの繋ぎとして、二十九歳で第七十七代天皇になるのです。

そして、翌年にはもう第一皇子である崇徳上皇と第四皇子である後白河天皇の兄弟二人の間で保元の乱が起きています。後白河天皇は、平清盛と源義朝を使って、崇徳上皇を破ると、讃岐に流してしまいました。さらに、天皇になった三年後には、皇位を二条天皇に譲位し、上皇になって院政を開始しました。その一年後に後白河上皇院政派と二条天皇親政派の間で平治の乱が起こりました。上皇と天皇の争いというよりむしろその下で政治の実権を院政派が握るか親政派が握るかの争いです。そして、政権で対立する実力者二人の内の信西側についた平清盛が、藤原信頼側についた源義朝に勝って、義朝は殺され、頼朝さまが伊豆の蛭が小島に流され、義経殿が鞍馬山の阿闍梨に預けられたのはご存知のとおりです」

郷子は、後白河法皇と頼朝、義経との繋がりはおぼろげながら判ったが、それでも、何故、自分が義経の正室になることと後白河法皇が関連してくるのかよく判らなかつた。

「平治の乱以降先ほどお話した通り平家が隆盛をきわめるのですが、それが、頼朝さまが蛭ヶ小島に流されていた期間と重なるのです。そして、その期間は、後白河法皇と平清盛との間であらゆる手練手管を使った主導権争いに費やされました。それは、皇室と摂政関白家と武士である平家との政治における力関係が変化する時代の流れでもありました。私と大江とは、行政をになう官吏という立場から、ずっとそれを見続け、分析し、その結果を頼朝さまにご報告し続けました。この国は、いま疲弊しています。

皇室内部の権力争い、摂政関白家内部の権力争い、上流貴族の腐敗、これらの中央政権の政治的無策と大衆からの搾取が、いまの飢饉を引き起こし大衆を苦しめているのです。

私と大江は、いまの政治体制を変革しなければ、この国は落ちる所まで落ちてしまう。そして、平家は、皇室を利用し、一族の栄華を求めるだけで、政治の体制を変えようとする意欲も力もないと判断しました。

私達の唯一の希望は東国武士の棟梁としての資格を持つ頼朝さまを錦の御旗に守り立てて、その下で変革を成し遂げようとするのでした。そして、頼朝さまが鎌倉に東国武士団の根拠地を置いたいま、私達は念願かなって、頼朝さまから、政務の補佐をするように依頼され、私は問注所の執事（長官）、大江は公文所の別当（長官）になって、政治改革がなし得る立場になりました。私達は、どんな犠牲を払っても、この目的を果たさなければならぬという情熱に燃えています」

三善は、学者風の容貌に似合わず、口から泡をとばして熱っぽく語った。

三善と大江の二人は、二十年という雌伏の期間を経て、いま将に、自分達の夢がかなうようなところまできている。

彼等は、全身全霊をこめて、後白河法皇を頂点とする現在の政治体制を改革しようとしているのだ。

—どんな犠牲を払っても！

そして、その役割の一部を私に託そうとしているのだろうか。

郷子は、義経との結婚話は、比企尼が言ったように、ただ、頼朝の乳母とその孫との姻族関係を通じて頼朝と範頼と義経の兄弟の紐帯を固めることだけを目的とした単純な縁組ではないものを感じた。

「私達の目指す政治体制とは、現在の政治体制、すなわち天皇を表に立て、実際には、院や摂政関白や天皇と姻戚関係を作った武士が、天皇の名前で政治を行う体制ではなく、天皇は天皇として敬った上で、政治の実権は武士が握って、武家政権が政治を担うという体制です。そのためには、武家政権は朝廷から完全に独立し、かつ統一された一体的なものでなければなりません。平清盛のように、朝廷と姻戚関係を作って、それを基盤として平家だけが実権を持つようなものであってはなりません。それでは、他の多くの武家集団をまとめきれないからです。河越家を例にとって見ましょう。父の重頼殿がいて、小太郎、二郎、三郎、四郎と四人の男の兄弟がいます。その下に家来として何人かの隊長がいて、さらに組頭がいて、一般の武士がいて、さらに雑兵がいますね。それは、丁度三角形のような形をしていて、頂点に重頼殿がいます。

重頼殿が一旦命令を出せば、それは順次三角形の上から下へ広がって雑兵まで伝わり、誰もその命令に従いますね」

「はい」

郷子は、頷いた。

「この場合、もし小太郎殿が父親とは、反対の命令を出したとしますと、家来は、どちらの命令に従ってよいか判らず混乱します。重頼派と小太郎派に分かれて喧嘩を始めるかも知れません。つまり、棟梁を頂点とする組織としての三角形はどんな犠牲を払っても守られなければならないのです。そうでなければ、内部から崩壊してしまいます。今までがそうでした、法皇がいて、上皇がいて、天皇がいて、それぞれに摂政関白がついていて、またそれぞれに武家集団がついていて争っているのですから、統一された政治が出来るはずがありません」

三善は、そこまで言うと、言葉を切ってじっと郷子を見つめた。

「いままでの話は理解していただけましたか」

「判ったような気がします」

郷子は、皇室の話は別として、河越家の話はよく理解できたのでそう答えた。

「義経殿は、頼朝さまの命令で都の守護に当たられています。都の人々は、義経殿を英雄視して、どこに出かけても大変な騒ぎだとか。女性の憧れのもとで、多くの女性に囲まれ、また当代随一の白拍子からも言い寄られているとの噂もあります。しかし、そんなことは問題ではない」

郷子は、それは違ふと心の中で叫んだ。もし、結婚するなら、夫に自分一人を愛して欲しい、自分も夫一人を愛したい。父と母は、むつまじく父に浮いた話ひとつ聞いたことがない。

三善も、それに気がついたのでろう。学者らしく頭をぼそぼそと掻いた。

「そう、あなたにとっては、気になる噂ですね。しかし、理解して欲しいのは、正室は、側室や妾や愛人や遊女とは全く違う立場にいるということです。

平清盛は、まず、親の勧めで、高階基章の娘と結婚して、重盛をもうけたが、正室は五年もたたずに逝ってしまいました。次に正室に迎えたのがいまの二位尼時子さまです。私達は、清盛については、嫌忌の情をもって接していましたが、時子さまの正室としてのあり方には敬服しておりました。平家一族の屋台骨を支えていたのは、清盛ではなくて、時子さまだと思っています。ご自分の実子の教育を熱心にされたのは無論のこと、清盛が時子さま妊娠中にお手付けになった愛人の子供も引き取って、分け隔てなく自分の実子のようにお育てになりました。その深い博愛の情は、まさに賢妻の鑑というものでございましょう。

清盛には、妓王という白拍子の話もあります。清盛は、この美しい男装の麗人が今様を歌い男舞を舞うとすっかりのぼせ上って、親子ほどの違いがあるこの白拍子を囲いものにして、家と金を与えて母と妹を加えた三人で優雅な暮らしをさせました。

それから三年ほど経ったころ、清盛の屋敷に仏御前という十六歳の白拍子が訪れました。初めは面会を断ったものの、妓王がそれではあまりにかわいそうととりなすので、気乗りせぬまま、仏御前に歌と舞を所望します。ところが、その可憐さに清盛もすっかり気に入り、妓王と母と妹を家から追い出し、代わりに仏御前を囲ったのです。白拍子との関係など、この程度のものに過ぎません」

郷子は、三善の話聞きながら、(この方は恐らく、義経さまと静御前の噂など取るに足らないことだと妓王の例を引いて、正室との違いを説明しようと試みているのだらう。しかし、実際は、見当違いの話をしていることに気がついていない。時子さまの賢妻ぶりも、妓王の話も結婚というものを幻滅させるばかりではないか。しかも、そもそも正室という呼び名からしても、側室や妾や愛人の存在を前提とするものではないだらうか)

三善はさらに付け加えた。

「妓王と清盛公の間に愛があったと思われませんか。愛などありませんよ。ましてや、清盛と仏御前との間に愛があったとは思われません。白拍子などは、男装をして歌や踊りを披露し、ただそれだけで力と金のある男の関心を引いて、囲われものになって、栄華を得ようとしている存在に過ぎないのです」

郷子は、堪えられずに言った。

「女子というものは、そんな風にただ殿御の力に縋って、生きていくしか術はないのでしょうか」

三善は、愕然とした。いままで、女が男から独立して生きていく考えなど聞いたこともなかった。いまの貴族社会や武家社会の中で女がまともに生きていくためには、妻か妾となって男の種を得て子供を生して子孫を残すかあるいは囲われものになって男の愛玩物として生きるかそれ以外の方法はないし、女もそれを望んでいると思っていた。

「今の世で女性が男に頼らず一人で生きていくためには尼寺に入って尼僧になるか、侍女になって主人に仕えるか、下婢となって飯炊き女になるか。あるいは、白拍子や傀儡のような芸人になるか、行き着く先は遊女になって春をひさぐか、まさか貴女はそんな人生を望んでいるわけではないでしょう」

「なぜ、殿御は、多くの女子と関係がもてるのでしょうか。あなたも、多くの女子と……」
三善は、あわてた。話が目的と大きく逸れてしまった。

「いやいや、私は妻しか知らない。だいたい公家などというものは、女子との色事しか考えていない代物だが、私は学問一筋の男だ。それと、武士は、戦に行く前は、死の恐怖におびえているから、それを忘れるために女を抱くし、戦から帰ったときは、生き残った喜びでまた女を抱くらしい。しかし、判って欲しいのは正室はそのような男の生理の対象となる女とはまったく別の存在なのですよ」

三善は、話がますますおかしな方へそれてきたので、ここで体勢を立て直す必要を感じた。そのためは、腹を割って真実を述べるしかない。

「義経殿が、白拍子などと遊んでいるうちは、我々は何も心配していません。

我々が、義経殿に関してもっとも懸念していることは、義経殿が公卿などと姻族関係を持つことなのです。義経殿は、後白河法皇の警護を行っているので、法皇からの信任は厚いと聞いているし、公卿には義経殿を格別ひいきにする人も多いと聞きます。すぐにでも、それらの子女との結婚話が起きる可能性があります。それは、先に話したように、頼朝さまを頂点とする武家政権の三角形の構図を守るためには絶対にあってはならない事なのです。たとえば、義経殿が、公卿などから嫁を迎えたりしますと、頼朝さまとの関係が微妙になってきます。すなわち、義経殿が三角形の外にあって、三角形に影響を及ぼす可能性がでてくるのです。それは、絶対に避けねばなりません」

「武士が公卿から正室を貰うことはありうるのでしょうか」

郷子には、疑問だった。

「確かに、武士が娘を皇室や公卿に差し出すことはあっても、その反対はほとんど有り得ないでしょう。しかし、公卿には、お手つきの女房が沢山居るし、隠し子も驚くほど多いのです。ですから、安全を期すためにはすべての可能性を排除しなければなりません。それと、もう一つ懸念しているのは、むかし義経殿が世話になった奥州の藤原家から正室を貰うことです。この可能性はかなりあります。なぜなら、義経殿の側近に奥州の領主藤原秀衡から派遣された佐藤継信、忠信の兄弟がいるからです」

「私が、義経さまの正室に入る大きな理由は、義経さまがそれらの方と姻戚関係に入るのを阻止するためなのです」

「その通りです」

三善は、正直に答えた。

「比企尼は、頼朝さまのご指示でそれを伝えにこられたのです」

「その通りです」

「そして、私が承諾しなかった場合の説得役としてあなたがこられたのですね」

「その通りです」

「そして、父も母も小太郎兄もそれを認めているのですね」

「その通りです」

郷子は、自分が蜘蛛の巣に捕らえられて身動きできない状態であるのが判った。

もうここから逃れる術はない。もし、自分があくまでも反対すれば、比企尼も三善康信も父も母も小太郎も頼朝さまに対して面目を失するのだ。

郷子が豪族の子女としてこれまで受けてきた教育から父母や家族に害を及ぼす決断は、出来なかった。豪族が、自分の娘を政略結婚の道具に使うことは、ごく当たり前のこととして認められている。例え、義経との話が無かったとしても、いずれは、身も知らぬ豪族の息子と結婚させられる運命なのだ。そうだとすれば、その目的が政策的なものであったとしても、義経の正室に入ることは、それほど悪いことではないかもしれない。

あとは、義経さまと真の愛を育む事が出来るかどうかに期待するほかない。

「義経さまは、私との結婚をご承諾されているのですか」

「これは、頼朝さまのご命令です。義経殿は、頼朝さまの臣下ですから、拒絶することはできません」

郷子は、もう逃れられないのが判った。そして、三善康信が初めから、頼朝さまのご命令ですと威圧的に言わなかった誠意を感謝して、丁寧に一礼した。

「よろしくお願い申し上げます」

河越館への帰途、口の重い重方が、比企館を出てから一言も話さない姉を気遣って訊いた。

「それで、結婚相手はお気の召さない相手なのですか」

「そんなことはありません」

重方は、ほっとした様子だったが、いつもは良く話す姉なのになぜ相手の名前を言わないのか疑問に思ったようだ。

「相手の名前を言えない事情でもあるのですか」

「そんなことはありません」

「では、どなたなのですか」

「義経さまです」

重方は、え！と驚きの表情をしたが、何も言わなかった。

それは、義兄になる人がいままで噂でしか聞いたことのない遥か雲の上の存在だったからか、あるいは、昨日、静御前との噂話をしたことを気にかけてからののか、郷子には判らなかつた。

二人は、自分の殻の中に閉じこもって夫々物思いに耽り、館に帰り着くまで、一言も交わさなかつた。